まめなかに 98

◎**名前**：前田　浩一さん　◎**家族**：妻
◎**住所**：大阪府大阪市　◎**職業**：公務員
◎**生きがい又は趣味**
趣味…食べ歩き・スポーツジム
◎**幼友達**：菊本　雄太さん
◎**ひと言 ふた言**
38年勤めた仕事を定年退職し、任期付職員として奈良県広陵町役場に就職し２年目になります。慣れない仕事で日々健闘しています。いくつになっても勉強ですね。仕事は令和10年６月までなので、それ以降はどうしようか思案中です。先日、法事で帰省した時に同級生の飲み会に参加させてもらい大変懐かしく思いました。その時の写真です。

読書のすすめ

『翔子の百物語』
金澤翔子・書　金澤泰子・文

書家の翔子さんはダウン症です。本書では翔子さんのダイナミックで個性的な「書」と母親の思いの込もった文章から、お二人が歩んできた道を辿ることができます。母親の泰子さんは、娘のことを「平和の使者のようだ」「魔法の力を持っている」「翔子に出会えたことに深く感謝する」と語っています。命の尊さを感じつつ、一日一日を希望を持って生きる姿は、読者に感動を与えてくれることでしょう。現在、翔子さんは念願の喫茶店のウエイトレスをしながら、一人暮らしをしています。

『わが子が不登校という問い』
―母として教師として―
坂本則子 著

○わが子の登校拒否
○わが子の登校拒否で私の人生はどう変わったか
○一人ひとりが大切にされる学校を作りたい
○登校拒否・不登校の問題に悩む仲間たちとともに

このような内容で書かれています。頑張り屋だった息子や娘が順に不登校になり、学校に勤めながら、わが子と壮絶な闘いを経験してきたお母さん先生の記録とも言えます。

後に振り返って、わが子の不登校は、自分にとって得がたい経験であり、教員として大きな学びであったと記しています。そして、今の時代の人間と教育について考える機会でもあったと。不登校当事者やその家族が孤立し、疲弊してしまわないように、前向きに打開するきっかけになって欲しい。また、子どもも大人も「ありのままで大丈夫だよ。」と思える自己肯定感の大切さを知って欲しいという著者の熱い思いが伝わってくる一冊です。

『がんと生ききる』
―悲観にも楽観にも傾かず―
落合恵子 著

タイトルの「生ききる」という言葉に、はっとさせられます。肺がんと診断されても、なおかつ自分の意志を大事に後悔のないよう生ききろうとする著者の姿が描かれています。二人に一人はがんにかかる時代と言われていますが、誰しもが、まさか自分が、とは思っていません。しかし、現実にがんの宣告を受けた著者は、「覚悟はできていた。受け止めるしかない。」と、抗がん剤や放射線治療を経て、２０２３年に退院し、通院しながら現在は、ほぼ普段の暮らしに戻っています。

「異議を唱えなければならないことが多すぎる。心から信頼できる人たちと理想の社会、人間関係について語り合い、実現するための終わりのない旅を続けていきたい。と自分に約束する。」と強い意志を持って生きる落合恵子さん。手術前の自分の顔と、手術後の丸坊主姿の自分を比較した写真を載せているのも落合さんらしさを感じます。後書きの故井上ひさし氏の言葉も意味深いものです。

闘病中の人に、多くの人々に勇気と生きる希望を与えてくれる一冊になるでしょう。

『デモクラシーのいろは』
森絵都 著

昭和21年ＧＨＱ（敗戦した日本を占領・統治するため戦後７年間設置された連合国の最高機関）が始めた実験的デモクラシー教室。

先生は日系２世の青年、生徒は古い制度や習慣に縛られながらもたくましく生きている日本の女性たち４名。個性豊かな登場人物によるトラブルと感動、ミステリーとどんでん返し、もちろんデモクラシーの勉強もあります。６００ページ超の長編ですが、リズムよく楽しく読めます

鯨波歌壇

リハビリで錘（おもり）のやうな吾の足がプール歩けば蘇りをり　正崎　光代

初秋（あき）の多年草嫁菜菊の花身巡りの何処（どこ）にも見えずブロック塀ばかり　世古　忠子

手入れすれば三十年はけるブーツ亡き娘（こ）の五足そのまゝ玄関（にわ）に　三原　勝利

一筋に汀（みぎわ）の波の巻きくずる泡はせつなきほど白じろと　吉田　敬

坂道の漂流人の碑の辺り見下ろす度に絶景という　畑下　雅昭

八十路前アルバム横に同窓会嬉しくもあり悲しくもあり　桝田　歌民

猛暑日のジムは涼を求めくるシニアであふれ会話がはずむ　東　ひとみ

いさな俳壇

夏帽子一つだけ乗せ最終バス　上田　ヒサミ

大夕焼見惚れる車窓紀勢線　サン・サーンスの「白鳥」梅雨明けの胸にひらく　三原岬風子（こうふうし）